

## 最優秀賞

たくさんのおしきにふれて

日吉学園 8年 外宮 愛理

田植えや稲刈りの時期になると、2年前に亡くなった祖父のことを思い出す。祖父は、米や野菜をたくさん作っていた。元気だった祖父が病気になり、亡くなった時、私はまだ小学生で励ますことしかできなかった。祖父は、私たちの笑顔を見ることや話をすることを楽しみにしてくれていた。祖父は、

「愛理ちゃん達を見ると元気が出るよ。」

と笑顔で話してくれた。祖父が亡くなって2年、心の中でずっと感じていることがある。それは、祖父にもう少し何かしてあげることができなかつただろうかということだ。初めての「最後の別れ」を経験し、思い出たびに胸が苦しくなる。私は、中学生になり自分に出来ることは挑戦してみようと思えるようになった。これまでの自分は、恥ずかしい気持ちが強かったが、これからは後悔したくないと思ったからだ。「失敗してもいい。挑戦しよう。」そう決めたとき、大好きだった祖父が背中を押してくれたような気がした。

1学期末、チャンスが訪れた。

「サマーボランティア体験に参加しませんか。」

学校で先生から、高齢者施設や保育園などの社会福祉施設でのボランティア体験が案内されたのだ。私は、高齢者施設に申し込むことにした。まず、私が参加する通所介護事業所について調べた。自宅で生活をしながら、介護を必要とする高齢者が利用する介護保険施設だ。体が不自由な人や認知症の人などが通っているという。7月28日の、説明会では、ボランティアの心得について学んだ。その中で、相手の気持ちになって行動すること、約束や秘密を必ず守ること、自分を成長させることが大事だと学んだ。これらのことを意識して活動をしようと思った。

「おはようございます。よろしくお願ひします。」

私は、いつもより大きな声で挨拶をし、体験の日が始まった。事業所の職員の方が、優しく出迎えてくださった。活動が始まると、不安な気持ちは無くなった。次々と利用の方々が来所された。職員の方々は、てきぱきと動いている。私も自分に出来るボランティアをがんばろうと一生懸命動いた。お茶をお出しした時、

「ありがとう。おおきに。」

利用者の方が、うれしそうに声をかけてくださった。

「あなたはどこから来たの。」

利用者の方が話かけてくださったとき、私はうれしくなって、こう答えた。

「日吉から来ました。日吉学園8年生です。」

それから、利用者の方と沢山会話が出来た。利用者の方のことや私の学校生活のことなど話に花が咲いた。

「あなたは、私の孫みたいだよ。」

利用者の方は、うれしそうに話して下さって一生懸命塗った塗り絵をプレゼントしてくださった。

「あなたのことを覚えているから、私のことも忘れないでね。」

今日出会ったばかりの利用者の方にこんなに優しくしていただけるとは思ってもいなかった。私は、とてもうれしかった。

「はい。絶対に忘れません。塗り絵、大切にします。」

気づいたら、いつもより大きな声が出て、私の気持ちもとても晴れやかだった。

サマーボランティア体験を終えて、私の心の中のもやもやとした気持ちが消えた気がした。祖父との別れは、悲しいことであったが、祖父は私に自分で出来ることは挑戦するということを教えてくれたのではないかと感じた。私の笑顔が大好きと言ってくれた祖父のためにも、私はこれからも自分に出来ることを考え、挑戦していきたい。そして、たくさんの人に私の笑顔を届けることが、祖父への恩返しになるのではないかと思う。

「じいちゃん、これからも私らしく、笑顔で後悔しないようにがんばるね。」

私の気持ちが祖父に届くように祈った。

